

日本語母語話者と学習者の指示表現選択の相違について

山形大学人文学部 渡辺文生

1. はじめに

本研究では、ストーリーを語る際に登場する人やものを指示する表現形式がどのように選択されているか、そしてそれらが談話の意味的なまとまりとどう関わっているか、日本語母語話者と学習者の談話データをもとに考察を行う。

ストーリーを語る際には、その中に登場する人物やものを指し示す表現が必要になる。(1)において、「ピングー」「雪玉」などの表現は、それぞれアニメーションの中のキャラクターやものを指示対象として指し示していると考えられる。

- (1) a. ピングー_b は 雪玉_y を 作って、
b. で ϕ_b ϕ_y 投げて、

指示表現(referring expressions)とは、このように対象を指し示す働きを持っている表現を指すものとする。「これ・それ・あれ」などの指示語(demonstratives)は、指示表現の下位概念として位置づけられる。本研究では、主にストーリーの登場人物を指す指示表現について考察する。

指示表現には音声形式をとまなうものだけでなく、省略形も含まれる。日本語については、指示表現を名詞句と省略形の2種類に分類する(Clancy 1980)。たとえば、(1 a)には、「作る」という動作の動作主とその動作の対象の2つの指示対象が現れていて、それぞれ「ピングー」、「雪玉」という名詞句の指示表現が用いられている。(1 b)では、それら2つの指示対象はそれぞれ省略され形の上では現れていないが、省略形として実現されている(realized)と考える。

2. データ

語り手役のインフォーマントにアニメーションを見せ、その後そのストーリーを聞き手役のインフォーマントに話してもらうという実験によりえられた会話データ(Chafe 1980, Fuller & Gundel 1987, 渡辺 1998)を用いる。日本語母語話者同士の談話データ15例、語り手が学習者(約150時間の日本語学習歴、母語は英語)聞き手が日本語母語話者の談話データ17例が考察の対象である。

3. 分析

3. 1 指示表現選択の原則

指示表現の形式と聞き手の知識や認知状態との関連については、Givon(1983)のtopic continuityやGundel et al.(1993)のgivenness hierarchyなどがある。既知あるいは意識の焦点が当たっているほど、その対象を指示する指示表現は音声的なサイズが小さくなり、そのもっとも小さいものが省略形である。

上記の先行研究などから、日本語の指示表現形式の選択の原則は次のようにまとめられる。

- ①指示対象が初めて談話に導入される時は名詞句で表される。
- ②聞き手の意識の中心にある指示対象には省略形が使われる。
- ③指示対象がしばらく発話の中に実現されず、聞き手の意識の中心からはずれてしまった場合(指示距離が遠い場合)や、他の対象を指示しているとも考えられるとき(干渉要素がある場合)は名詞句が使われる。

【資料1】の談話を例に用いて、この原則を見ていくことにする。まず、①に関しては本研究のデータでは、聞き手はストーリーに関して何も知らないので、当然初めて登場人物(ピングー、お母

さん…) やもの (凧, 雪玉…) が導入される時は名詞句が用いられる。

名詞句によって導入された後は、干渉要素がなければ、②の原則に従ってその指示対象が聞き手の意識の中にあるとみなされ、省略形が使われる。【資料1】の表には主要な登場人物を指示する表現の形式を示してある。表中の矢印は、丸で囲んだ名詞句が話題として継続している範囲である。この矢印が及んでいる範囲内では、ほとんどの指示表現が省略形で現れている。特に、67節から87節にかけての「両親」を指示する省略形の現れ方が顕著である。

ある登場人物に関わる内容からほかの登場人物の内容へと話題をシフトする場合には、名詞句を用いて導入する。これは③の原則に関わる名詞句の使われ方である。【資料1】においては、10～45節の「ピングー」と「ピング」それぞれの行動が対比されている部分で、動作主が変わるたびに名詞句で導入されていることが分かる。

以下では、収集した談話データのうち主に、妹のピングが家の中の両親に助けを求めに行き断られてまた外に戻る場面（場面1）と、ピングーが投げた雪玉がちょうど家から出てきたピングに当たり、そのあと2つ目の雪玉をピングーが投げるまでの場面（場面2）の2つの場面について語っている部分を取り上げて、登場人物を指示する指示表現の使われ方を分析していく。

例文は、下のように節番号、発話者コード、テキストを示す。

節番号	発話者コード	テキスト
↓	↓	↓
7	Si	<u>お母さ[んは]</u> 新聞を読んで、/#[うん]. /#うん. /

談話テキストは、節単位に区切った。あいづちは、独立した発話とせず、相手側の発話に付随したものと扱って区切っている。さらにイントネーション・ユニット (Chafe 1994, Du Bois et al. 1992, 1993) の境界を「/」で示した。「#」は、聞き手による発話を表す。また、[] で囲まれた部分は同時に発話されたものであることを示す。そのほかのテキスト中の記号については、末尾にある凡例を参照されたい (Du Bois et al. 1992, 1993)。また、名詞句として現れる動作主を下線で示してある。

談話テキストの下に、指示表現形式と指示対象、格形式、述語をまとめたものを枠線で囲んで示しておく。インデックスを使って指示対象を区別するが、それぞれ b = ピングー, s = ピング, m = 母親, d = 父親, k = 凧, y = (ピングに当たった) 雪玉を表す。斜体文字は聞き手による発話を表している。

3. 2 母語話者の談話

3. 2. 1 場面1

場面1は、凧が家の屋根に乗かってとれなくなってしまった後の場面で、妹のピングが家の中の両親に助けを求めに行くが、断られてまた外に戻る場面である。

(2) では、一貫して「下の子」、つまりピングがガ格に立つ関与者として現れている。3節や6節のように、母親や父親が動作主となる出来事に対して、受け身文を用いることにより、主体となる関与者が一定となるような語り方になっている。

- (2)
- 1 Ka そしたら下の子が、/お家の中に行って、/#うん. /
 - 2 Ka 新聞読んでお母さんに、/なんか取ってみたいに言ったけど、 /
 - 3 Ka 取れないわーみたいに言われて、/#[うん]. /
 - 4 Ka [今度]奥に、/アイロンかけたお父さんとこに行って、 /
 - 5 Ka 取ってみたいに言ったけど、 /
 - 6 Ka 取れないよーって言われちゃって、 /
 - 7 Ka こう、/下の子あきらめて
 - 8 Ka 出ていったの、 /

1	そしたら	下の子 _s が	家の中に		行って、
2		φ _s (が)	お母さん _m に	取ってと	言ったけど、
3		φ _s (が)	φ _m (に)	取れないわと	言われて、
4	今度	φ _s (が)	お父さん _d とどこに		行って、
5		φ _s (が)	φ _d (に)	取ってと	言ったけど、
6		φ _s (が)	φ _d (に)	取れないよと	言われちゃって、
7	こう	下の子 _s (が)			あきらめて、
8		φ _s (が)			出ていったの。

ピンガを指示する表現の形式を見ると、1節で「下の子」という名詞句の形で導入され、2～6節の間は省略形が用いられている。7節を発話する時点で「下の子」は聞き手の意識の中心にある指示対象であり、省略形を用いても聞き手は問題なく指示対象を同定できるはずである。しかし7節では名詞句が使われている。

場面の展開は、多くの場合、意識の中心となっている登場人物の移動によって引き起こされる（ザトラウスキー 2001）。場面1は、家の中で起こる出来事が中心だが、ピンガの屋外から家の中への移動により始まり、屋外への移動によって終わる。ピンガの移動が場面展開の引きがねとなっている。（2）では、移動を表す内容の節にのみ名詞句が使われている。

「下の子」がずっと意識の中心にある指示対象であるということは変わらないのだが、7節で名詞句を使うことによって、そこから新たな場面への展開が始まるということが示されている。

3. 2. 2 場面2

場面2は、ピングーが投げた雪玉が、ちょうど家から出てきたピンガに当たり、そのあと2つ目の雪玉をピングーが投げるまでの場面である。

(3)では、語り手は1～3節で場面2の話語り始めようとするが、4節の聞き手による質問によって、ストーリーの場面設定に関する話題が17節まで続く。その後、18節から場面2の最初に戻って出来事が語られている。

- (3)
- | | | |
|------|----|---|
| 1 | Ki | そのとき、/ <u>ピングー</u> 外でこういう...玉作ってさ、/#うん。 / |
| 2 | Ki | こうやって落とそうとしてたの。/#うん。 / |
| 3 | Ki | で最初の玉が、/妹にカーンと当たって、 / |
| 4 | To | #何雪降ってんの? / |
| 5 | Ki | 違う違うー雪玉あの、/何だー何つうの? /雪のスノーー / |
| 6 | Ki | あー違う、 / |
| 7 | Ki | 英語じゃだめなんだよね、 / |
| 8 | Ki | @@ / |
| 9 | Ki | (H)あの一 / |
| 10 | To | #え雪いっぱい降ってあんねや。 / |
| 11 | Ki | そう。 / |
| 12 | Ki | あの一何? / [南極]みたいなとこ。 / |
| 13 | To | # [寒い<XとこX>]一 / |
| 14 | To | #お一[[ピングー]]やもんな、 / |
| 15 | Ki | [[そうそう]]. / |
| 16 | Ki | そうそうそう[そうそう]. / |
| 17 | To | # [分かった]分かった。 / |
| 18 | Ki | それで、/雪、/何つうの、/雪の玉作って、/#うん。 / |
| 19 | Ki | で、/投げたの、/#うん。 / |
| 20 | Ki | でそれが、/一発目が、/妹にゴーンと当たって、/#うん。 / |
| 21 | Ki | 泣いちゃって、/#うん / |
| → 22 | Ki | で一、/二発目投げて、 / |

1-2	そのとき	ピンゲー _b (が)		…そうとしてたの。
3	で	最初の玉 _y が	妹 _s に	当たって、
	∴			
18	それで	φ _b (が)	雪の玉 _y (を)	作って、
19	で	φ _b (が)	φ _y (を)	投げたの。
20	で	一発目 _y が	妹 _s に	当たって、
21		φ _s (が)		泣いちゃって、
22	でー	φ _b (が)	二発目 (を)	投げて、

18節で語りが再スタートしたとき、ガ格補語のピンゲーには省略形が使われている。場面設定に関する話題があいだに入ってしまったが、1節で使われた「ピンゲー」という名詞句が、まだ継続性を持ったトピックであると、語り手が認識していることがうかがえる。

21、22節では動作主を表す指示表現が両方とも省略形になっているが、指示対象は異なる。21節で「泣い」たのは「妹」である。22節で「二発目投げ」たのは「ピンゲー」であるが、ここで使われている省略形は可能性としては「妹」とも解釈でき、潜在的にあいまいである。

(3)で潜在的にあいまいな省略形は、ピンゲーが雪玉を投げて凧を取ろうとする行動の中で起こったハプニング(20~21節)の部分の直後に生じている。また、「1つ目を投げて、2つ目を投げる」という同じ行動パターンのくりかえしも、これらの省略形の使われ方に影響していると思われる。つまり、「最初に雪玉を投げた」のはピンゲーだから、直前の節のガ格補語はピンゲー以外の指示対象を指示しているが、「二発目を投げた」のもピンゲーであると推論できるだろうという予測である。

このような潜在的にあいまいな省略形の使用は、談話のまとまりの中では比較的小さい区切りを示すものと言えよう。そして、その場面でもっとも重要な登場人物とそれ以外の登場人物とを区別する手段の一つともなっている(Clancy & Downing 1987)。

3. 3 日本語学習者の談話

3. 3. 1 場面1

(4)は、日本語学習者による談話で場面1について語っている部分である。動作主の名詞句に下線を引いて示してある。(ピンガは妹という設定だが、アニメーションを見る限りでは性別がはっきりしないので、語り手によって「弟」と呼んだりする場合がある。)

- (4) 1 Sn あのー、/あー、/あー、/弟は、/あのー、/何と言う?/両親。/あのーに、
/あの助けてー、/助けてー、/とか言って、/#うん
- 2 Sn あのー、/またあのうちに行って、/
- 3 Sn 最初は、/あの、/母ちゃんは、/あのーしんぬんをー、/読みながら、/@@
/読んでいる。/
- 4 Sh #な何を読んでいる。/
- 5 Sn 新聞?/
- 6 Sh #新聞?/
- 7 Sn 新聞を読んでいる間に、/#うん。/
- 8 Sn あのー、/弟は、/あっお母さん、/何とか何とかっていつて、/#うん。/
- 9 Sn あの、/お母さんはもちろん。/うー[@@]<@もうしないよ@>とか、/
- 10 Sh #[@@]/
- 11 Sn でも、/もちろん日本語じゃなくて、/[あの]うん。/
- 12 Sh #[うん]。/
- 13 Sh #ペンギン語で、/

- 14 Sn ええペンギン語で、 /
 15 Sh #@@/
 16 Sn もう@@とか。 /
 17 Sn じゃああの、/あのちっちゃい子は、 /じゃああの、 /父さんにいって、 /
 18 Sn 父さんは、 /あの一、 /あの一、 /アイロ-アイロン? /
 19 Sh #[アイロン]? /
 20 Sn [アイロン]? /
 21 Sn アイロン? /をかけるけど、 /#うん。 /
 22 Sn あの一、 /忙しいから、 /
 23 Sn 何もしなかった。 /#うん。 /
 24 Sn から、 /ちょっと弟はちょっと、 /は一ん一、 /じゃあまた(H)外に行っちゃっ
 て、 /#うん。 /
 25 Sn あの一、 /@@/そのところは、 /あの一、 /兄ちゃんは、 /あの一、 /雪の
 玉? /#うん。 /を作っているあいだけけど、 /
 26 Sn あの一、 /投げて、 /#うん。 /

1	あの一	弟 _S は	両親 _{m d} に	助けてと	言って、
2	あの一	φ _S (が)	家に		行って、
3	最初	母ちゃん _m は	新聞を		読んでいる。
7		φ _m (が)	新聞を		読んでいる間に、
8	あの一	弟 _S は		お母さん _m 何とかと	言って、
9	あの	お母さん _m は	φ _S (に)	しないよと	(言って)、
17	じゃあ	ちっちゃい子 _S は	父さん _d に		言って(行って?)、
18-21		父さん _d は	アイロンを		かけるけど、
22		φ _d (が)			忙しいから、
23		φ _d (が)	何も		しなかった。
24	(だ) から	弟 _S は	外に		行っちゃって、
25	その	ところは	兄ちゃん _b は、	雪の玉を	作っている間だけけど、

(4) では、動作主が替わるたびに、名詞句+「は」で導入され、その動作主の動作が続くかぎり省略されている。たとえば、18節で「父さんは」名詞句だが、22節23節では省略形である。

指示表現だけに限って言えば、ここでの形式の選択は、①~③の原則に従ったものだと言える。しかし、動作主の格の名詞句にすべて「は」を用いているため、この家の中の場面では誰が主要な登場人物であり、誰が副次的な登場人物であるかが分かりにくくなってしまい、その結果、場面の一貫性が損なわれている。つまり、この場面は「弟」が親に助けを求めるといった目的に沿った一連の出来事であるということがはっきりしなくなり、それぞれの動作主の行為を羅列しているようになってしまっている。

3. 3. 2 場面2

(5) は、日本語学習者による談話で場面2について語っている部分である。最初の1~2節は、母語話者の聞き手が語り手に質問している発話で、1節で「お兄さん」が名詞句で導入されている。

- (5) 1 Di #お兄さんは、 /#雪のボールを投げて、 /はい。 /
 2 Di #凧を取ろうとしたの。 /
 3 Js そうですそうです。 /
 4 Di #は一は一。 /
 5 Js でも、 /あの、 /ふん。 /あの一、 /一番目一番目の、 /の、 /あ一、 /雪ボールは、 /#ええ。 /あの、 /あ弟に一/あ一、 /あの何てか落ちちゃった。 /#ええ。 /
 6 Js だっから、 /あの、 /おちやどはちょっとない一/あ一、 /あ一泣いちゃって、 /#うん。 /

- 7 Js でも、/すぐ、/あの大丈夫になって、/
 → 8 Js (H)あの一、/まだ、/あーまた、/あの一、/雪ボールを、/あー投げました。/
 9 Js あ一、/あの、/カアイトは、/あの、/何と言うか、/土?/#うん、/んーグ
 ラウンドに、/#うん、/落ちあ落ちあ落ちて、/
 10 Js でも、/壊れちゃった。/
 11 Di #あー壊れちゃった。/

1		お兄さん _b は	雪のボール _y を	投げて、
2		φ _b (が)	風を	取ろうとしたの?
5	でも	雪ボール _y は	弟 _s に	落ちちゃった。
6	だから	おちゃど _s は		泣いちゃって、
7	でも	φ _s (が)		大丈夫になって、
8	あの一	φ _b (が)	雪ボールを	投げました。

(5)にも、「二つ目の雪玉を投げる」ところで潜在的にあいまいな省略形を用いる現象が見られる。7節、8節と、隣接する節にそれぞれ省略形が現れているが、7節の省略形の指示対象は6節で名詞句になっている「おちゃど(「弟」の言い間違い)」であり、8節の省略形は「お兄さん」が指示対象である。

この場面では「お兄さん」が主要な登場人物であり、「弟」は副次的な役割であるという、登場人物間の階層関係が、母語話者による(3)の談話例と同様に示されている。

3. 3. 3 場面の境界を越えて省略形を続けて用いる例

(6)は、雪玉で風が壊れてしまった後の展開を(5)と同じ語り手が語っている談話の部分である。

- (6) 1 Js あ一、/兄のペンギンは、/あの一、/あ一、/うちに入って、/
 2 Js あの一、/両親と相談して、/
 3 Js でも、/両親は、/あ一、/何もしない、/#うーん、/
 → 4 Js それから、/あの一、/弟とちょっと、/あ一、/あ一、/相談して、/
 5 Js それからあのペンギンのおじいさんに、/あの、/行きあー行きます、/#うん
 うん、/
 6 Js 行きました、/
 7 Js あのいろいろの、/あ一、/家のを通したけど、/
 8 Js あの一、/
 9 Di #うん?/
 10 Js 誰も一/あの何と言うか、/あの、/通しじゃなくて、/あの、/
 11 Di #ペンギンの兄弟はみんな、/うん、/#おじいさんのうちに、/
 12 Js そう、/二人で一、/
 13 Js そうです、/

1	あ一	兄のペンギン _b は、	家に	入って、
2	あの一	φ _b (が)	両親 _{m d} と	相談して、
3	でも	両親 _{m d} は	何も	しない。
4	それから	φ _b (が)	弟 _s と	相談して、
5-6	それから	φ _{b s} (が)	おじいさんに	行きました。
7	あの	φ _{b s} (が)	いろいろな家を	通ったけど、

ここでは、(3)や(5)のように指示対象の異なる省略形が隣接しているというのではないが、4節に潜在的にあいまいな省略形が現れている。1節で「兄のペンギン」が名詞句、2節では同一指

示の省略形が使われ、3節では「両親」が動作主として名詞句で現れている。そして4節の「相談した」動作主の省略形は、「兄のペンギン」を指示しているのだが、可能性としては「両親」とも解釈できる。

潜在的にあいまいな省略形、しかも主要な登場人物を指示する省略形という点では(3)(5)と(6)は共通しているが、どういう談話の区切りに生じているかという点では違いがある。場面2について語る(3)や(5)の例では、同じ空間的場面の出来事の中で起きた一つのハプニング(失敗してピングが泣いてしまった)の後という、小さな談話のまとまりの区切りに生じているが、(6)の例では、家の中から屋外という、空間的場面展開の区切りに生じている。1節から3節は家の中の場面。4節に場所の明示はないが、「弟」がいる場所は家の外と推論されるから、場面が変わって次の展開に移ったと理解できる。

母語話者の談話では、たとえ省略形を使える文脈でも、場面の区切りで(2)の例のように名詞形を用いることが多い。名詞形を用いることによって、場面が変わった、次の展開に移ったということが示される。(6)の4節のように、省略形ではあいまいさが生じる可能性がある場合はなおさら名詞句が使われるであろう。

(5)と(6)は同一の語り手による談話だが、この語り手は(4)の語り手とは対照的に、主要な登場人物に対して省略形を多用する傾向があると言える。そのため、(5)の1~2節や(6)の11節のように、聞き手は指示対象を確認する発話を行っている。

(5)の場合の潜在的にあいまいな省略形は、母語話者にも見られる使われ方だが、(6)の場合は、主要な登場人物である「兄のペンギン」に省略形を使い続けることによって、場面の区切りを分かりにくいものにしてしまっている。

4. まとめ

日本語母語話者と学習者の談話データをもとに、ストーリーを語る際に登場する人やものを指示する表現形式がどのように選択されているか、そしてそれらが談話の意味的なまとまりとどう関わっているか考察した。

日本語母語話者は、場面の境界などで指示表現の原則的な選択の仕方に則らずに語ることが多い。省略可能な文脈で名詞句を使うことは、指示表現選択の原則の②に反するが、これは空間的場面展開のような談話の区切りを示すマーカーになっている。また、原則の③に反する潜在的にあいまいな省略形の使用は、副次的な登場人物の行為など同一場面内の比較的小さな出来事の切れ目に生じて、登場人物間の重要度の違いを示す手がかりにもなっている。

学習者の談話では、動作主が変わるたびに名詞句を用いたり、主要な登場人物に省略形を使い続ける例を採り上げて考察したが、それらは談話のまとまりをうまく示せないという結果につながっている。(Szatrowski 2002)

Chafe(1980)は、ストーリー全体を一つの文で語るケース(…して、…して、…して、……しました。)と、ストーリーのすべての節を単文にして語るケース(…しました。…しました。……しました。)は、ストーリーの内部を構造化していないという点では同じだと述べている。

指示表現の使い方に関しても、動作主が変わるたびに名詞句を用いるのと、継続性の高い主要な指示対象をずっと省略し続けるのは、談話を構造化する技術の未熟さを示すという点では同じと言える。母語話者の談話では、一見指示表現選択の原則を破っているように見えても、それらの指示表現の使い方が談話のまとまりを示す一手段となっている。

*この研究は、科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「日本語学習者と母語話者の語りの談話における指示表現使用についての研究」(課題番号:13680348 研究代表者:渡辺文生)の成果の一部である。

第15回日本語教育連絡会議での研究発表の原案について、ミネソタ大学のポリー・ザトラウスキー氏からアドバイスをいただいた。ここに記して感謝の意を表する。

【談話テキスト中の記号】

.	下降イントネーション	(H)	吸気音
,	継続調イントネーション	@	笑い声
?	上昇イントネーション	<X X>	聞き取りにくい部分
...	ポーズ	<@ @>	笑い声で発話されている部分
[]	同時に発話されている部分	<WH WH>	ささやき声で発話されている部分
—	中断されたイントネーション・ユニット		

【参考文献】

- Chafe, Wallace. 1980. The deployment of consciousness in the production of a narrative. *The pear stories*, ed. by W. Chafe, 9-50. Norwood, N.J.: Ablex Pub.
- 1994. *Discourse, consciousness, and time*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Clancy, Patricia. 1980. Referential choice in English and Japanese narrative discourse. *The pear stories*, ed. by W. Chafe, 127-202. Norwood, N.J.: Ablex Pub.
- Clancy, Patricia and Pamela Downing. 1987. The use of *wa* as a cohesion marker in Japanese oral narratives. *Perspectives on topicalization: the case of Japanese wa*, ed. by J. Hinds, S. Maynard and S. Iwasaki, 3-56. Amsterdam: John Benjamins.
- Du Bois, John, Stephan Schuetze-Coburn, Danae Paolino and Susanna Cumming. 1992. *Discourse transcription: Santa Barbara Papers in Linguistics*, vol. 4. Santa Barbara: Department of Linguistics, University of California, Santa Barbara.
- Du Bois, John, Stephan Schuetze-Coburn, Susanna Cumming and Danae Paolino. 1993. Outline of discourse transcription. *Talking data: Transcription and coding in discourse research*, ed. by J. Edwards and M. Lampert, 45-89. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum.
- Fuller, Judith and Jeanette Gundel. 1987. Topic-prominence in interlanguage. *Language Learning* 37:1-18.
- Givon, T. 1983. Topic continuity in discourse: an introduction. *Topic continuity in discourse: a quantitative cross-language study*, ed. by T. Givon, 1-41. Amsterdam: John Benjamins.
- 1995. *Functionalism and grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- Gundel, Jeanette, Nancy Hedberg and Ron Zacharski. 1993. Cognitive status and the form of referring expressions in discourse. *Language* 69. 2: 274-307.
- Szatrowski, Polly. 2002. Story units in animation storytellings by Japanese native and non-native speakers. Paper presented at AAS 54th Annual Meeting.
- ザトラウスキー, ポリー 2001 「アニメーションのストーリーを語る際の話段と中心発話」 第38回表現学会全国大会 (『表現研究』近刊)
- 渡辺文生 1998 「指示表現の形式と聞き手による解釈の過程」 『山形大学日本語教育論集』1, 25-38.
- 1999 「ナラティブ・ディスコースにおける節のくりかえし」 『山形大学日本語教育論集』2, 53-68.
- 2001 「日本語の談話におけるゼロ形式の指示対象について」 中右実教授還暦記念論文編集委員会(編) 『意味と形のインターフェイス 下巻』 847-857. くろしお出版

【資料1】

節番号	テキスト	ピングー	ピング	子供たち	母親	父親	両親
001W	じゃあどうぞ、始めてください。 /						
002Ck	はい。 /						
003Ck	じゃ始めます。 /						
004Rm	#はい、 /						
005Ck	とー。まずはー、 /ピングーとピングが遊んでる場面でー、 /			名詞句			
006Ck	[ピングー] /	名詞句					
007Rm	# [ピング] ってピングーの女の子のやつだよ、 /	名詞句	名詞句				
008Ck	弟、 /		省略				
009Rm	#弟? /		省略				
010Ck	でー。 /ピングーがー。 /凧を揚げて	名詞句					
011Ck	遊んでー。 /#うん。 /	省略					
012Ck	それをー。 /ピングが見ている。 /#うん。 /		名詞句				
013Ck	でピングーは、 /ちょっと遊んで、 /	名詞句					
014Ck	でーそれでコンー/あるときコントロールを失って、 /#うんうん。 /	省略					
015Ck	なんか。 /凧が、 /屋根の上にとさっと。 /#うん。 /乗っかってしまいます。 /#はい。 /						
016Ck	でー。 /どうやっても落ちない。 /						
017Ck	引っ張っても	省略					
018Ck	[落ちない]。 /# [うん]。 /						
019Ck	ずんずん引っ張ってたら、 /	省略					
020Ck	ヒモが。取れてしまって、 /						
021Ck	もどうしようもなくなっちゃって、 /#うん。 /						
022Ck	そこでピングが、 /#うん。 /家ん中入って、 /		名詞句				
023Ck	家ん中にはお母さんとお父さんがいるから、 /#うん。 /						名詞句
024Ck	それで行って、 /		省略				
025Ck	ちょっと取ってほしいんだけどってこう頼みに行くんだけど、 /		省略				省略 名詞句 省略
026Ck	お父さんとお母さんは、 /新聞読んでたり、 /#うん。 /						
027Ck	アイロンかけてたりして、 /						
028Ck	忙しいからダメって、 /いうふうに断られちゃうの。 /#うん。 /		省略				省略
029Ck	でー。 /ピングがー。 /家ん中から出てきたとき、 /#うん。 /			名詞句			
030Ck	ピングーは、 /雪の雪玉? /を作って、 /#うん。 /	名詞句					
031Ck	で投げて	省略					
032Ck	当てて	省略					
033Ck	落とそう [としてたんだけど]、 /# [はいはいはいはい]。 /#うん。 /	省略					
034Ck	1回目は、 /それがピングに当たって、 /		名詞句				
035Ck	ピングが泣いちゃうんだよ、 /		名詞句				
036Rm	#かわいい。 /						
037Ck	でピング。 /あー御免ねっていうみたいに、 /こうな [くさめて]、 /# [うん] うん。 /	省略	名詞句 省略				
038Ck	で2回目は、 /当たって、 /#うん。 /						
039Ck	ちゃんと、 /落ちる。 /んだけど、 /#うん。 /						
040Ck	そのも壊れてしまって、 /#ふんふんふん。 /						
041Ck	凧が壊れちゃって、 /#うん。 /						
042Ck	はー。 /でもっかい、 /今度はピングーがー、 /#うん。 /お母さんとお父さんに、 /#うん。 /直して [<@ほしいんだけどって言って@>]。 /# [@@@] /	名詞句					名詞句
043Ck	(H)でもやっぱり断られて、 /#うん。 /	省略					省略
044Ck	でピングーは怒って、 /#うん。 /	名詞句					
045Ck	なんか、 /ソリを。 /でっかいソリを出して	省略					
046Ck	二人で、 /#うんうん。 /なんか、 /ある場所に、 /行こうとするんだよ、 /#うん。 /			名詞句			
047Ck	でー。 /行った先が、 /多分だけど、 /おじさんだと思うんだけど、 /#うん。 /						
048Ck	おじさんのところに行くんだよ。 /						

節番号	テキスト	ピンゲー	ピンガ	子供たち	母親	父親	両親
049Ck	なんか町をずーっとすり抜けて。 /			省略			
050Rm	#ソリに、/#2匹ちゅう<@ [のか] 二人が@>。 / [@] / #乗って、 /			名詞句			
051Ck	うん。 /						
052Rm	#おじさんちまで行くの? /			省略			
053Ck	そうそう。 /						
054Rm	#ふんふん。 /						
055Ck	なんか、/いろいろな人の家の前とかダーっと通って、/#ふんふんふん。 /			省略			
056Ck	そんでおじさんちまで行くんです。 /#うん。 /			省略			
057Ck	でおじさんちでー、/なんか、/風壊れたんだけどもっかい作りたいみたいなことを言ったら、 /			省略			
058Ck	[おじさんち] で作ってたみたいで、/# [ふんふん]。 /#うん。 /						
059Ck	作らしてもらって、/#うん。 /			省略			
060Ck	ピンゲーは、/こう、/骨組みとか作って、 /	名詞句					
061Ck	ピンガはこう、/風の絵を描いて、/#ふんふんふん。 /		名詞句				
062Ck	でー、/一方、/おうちの方だと、/#うん。 /なんか、/親父さんとか、/が、 /						名詞句
063Rm	#<@お父さん [お母さんが] @>、 /						名詞句
064Ck	<@ [そうそう] お母さんがー@>、 /						名詞句
065Ck	(H)なんか、/時間が、/もう6時-/ご飯の時間になりそうなのに、/#うんうんうん。 /						
066Ck	ピンガたちが戻ってこないから			名詞句			
067Ck	心配になって、/#うん。 /						省略
068Ck	外に出て、 /						省略
069Ck	ピンゲーとか呼んでも、 /		名詞句				
070Ck	[来ない] から、/# [うん] うん。 /			省略			
071Ck	いやどうしたんだろうってことで、/#うん。 /						
072Ck	なんか、/またソリの、/自動ソリみたいなやつに、 /						
073Rm	#<WH@WH>/#モーター付きなんだ。 /						
074Ck	そうそうそうそう。 /なんかバイクのでっかいみたいなやつに [乗って]、 /						省略
075Rm	# [うんある] よね、 /						
076Rm	#うん。 /						
077Ck	で捜しに行くの。 /#うん。 /			省略			省略
078Ck	で、/いろいろな人の、/#うん。 /家の前通るから、/#うんうん。 /						省略
079Ck	ちょっと聞いたりして、 /						省略
080Ck	ちょっと見ませんでしたかって聞いても、 /			省略			省略
081Ck	み誰も見なかったって言って、/#うん。 /						省略
082Ck	でやー困ったわねえみたいな感じで、/#うん。 /						省略
083Ck	お母さん悲しそうな顔してて、 /				名詞句		
084Ck	でー、/最終的にはそのおじさんちに行くんだよー。 /#うん。 /						省略
085Ck	そうするとおじさんちの...上に、/屋根の上に風が揚がっているの見える、/#うんうん。 /						省略
086Ck	あっもしかしたらってことで、 /						省略
087Ck	奥に行ったら、/#うん。 /						省略
088Ck	やっぱりピンゲーとピンガがいて、/#うん。 /			名詞句			
089Ck	でお父さんとお母さんが、/おじさんみたいな人に、/あーどうもありがとうございましたみたいなことを言って、/#うん。 /						名詞句
090Ck	でみんなでこう仲良く最後は...帰っていくと。 /#おー。 /						
091Ck	でピンガ-/うん?/ピンゲーは、/# [うん]。 / [すぐく] ...うれしそうに風を揚げる...姿が印象的でした。 /	名詞句					
092Rm	#なるほど、 /						
093Ck	それで終わりです。 /						
094Rm	#分かりました。 /						